

講史小説と歴史書（３）

——『北宋志伝』、『楊家将演義』の成書過程と構造——

上 田 望

第 6 章 楊家将物語の演变 ——『北宋志伝』、『楊家将演義』より見た ——

第 1 節 宋元明三代の楊家将物語

第 2 節 『北宋志伝』と『楊家将演義』

第 3 節 『北宋志伝』の基づいた歴史書

小 結

第 1 節 宋元明三代の楊家将物語

楊家将と聞いてすぐに「楊業」や「楊六郎」、「穆桂英」などの人名が頭に浮かぶようであればかなりの中国通と言えるであろう。小説などがほとんど紹介されていないこともあって、日本においては全くと言っていいほど認知されていないが、旧中国では『三国志演義』に次ぐ人気を誇ったのがこの楊家将の物語であった。

楊業は実在の人物であり、五代末から北宋初期にかけて活躍した武将である。もともと北漢に仕えていた楊業は北漢が宋に降ると今度は宋の將軍として勇名を轟かせるが、『宋史』などによれば出征中、契丹の大軍に遭遇して奮闘空しく捕らえられ、節を守り食を断って死んでいる。彼や彼の子孫たちは對外戦争にたびたび従軍し、特に楊業は上役に疎まれ非業の死を遂げたことから民間では人気が高く、欧陽修「供備庫副使楊君墓志銘」では楊業とその子延昭について、「父子皆名将為り、其の智勇もて無敵と号称す。今に至りて天下の士、里巷の野豎に至るまで能く之を道う」と述べている⁽¹⁾。『醉翁談録』には『楊令公』『五郎為僧』などの楊家の物語の話本が宋代に存在していたこ

とが記録されている。また演劇のほうでは、金の院本に『打王枢密』なる演目があったことが『輟耕録』より知れるほか、雑劇では元朱凱『放火孟良盜骨殖』雑劇（『元曲選』）、元閔漢卿『孟良盜骨』（佚）、無名氏『謝金吾詐拆清風府』雑劇（『元曲選』）、無名氏『八大王閔詔救忠臣』雑劇（脈望館明抄本）、『焦光贊活拏蕭天佑』雑劇（脈望館明抄本）、無名氏『楊六郎調兵破天陣』雑劇（脈望館明抄本）など多くの作品がある。このうち脈望館明抄本の雑劇はあるいはこれから論じる楊家将平話や小説の影響を受けて成立したものかもしれない。悲劇の主人公楊業は雑劇の故郷ともいべき山西の出身であり、のちに雑劇が広く流行する北方中国を転戦し各地にその足跡を残したであろうから、彼ら一族——いわゆる楊家将——の物語は雑劇の格好の素材であったのだろう。語り物や演劇によって育まれた楊家将の物語はおそらく明代に入ってから集大成され、こんどは書物というメディアによって新たな物語を再生産してゆく。明代につくられた小説は我々が知る限りでは今のところ二種類あり、一つが『北宋志伝』、もう一つが『楊家将演義』である。『北宋志伝』は『南宋志伝』と合刻され『南北宋志伝』というかたちで明代では広く流布している。『北宋志伝』の版本については前章ですでに述べているのでここでは繰り返さない。一方、『楊家将演義』の現在知られている版本には次のようなものがある。

楊家府世代忠勇通俗演義志伝 楊家府演義，楊家将演義

8巻58則 紀振倫（秦淮墨客）序

〔臥松閣蔵板〕 10×20 挿図 明万曆34年（1606）序刊

【北京大学（二本）】

刊本 10×20 挿図 明万曆34年序？刊

【台湾中央図書館・美国国会図書館・北平図書館】台湾国立中央図書館
編印歴史通俗演義所収影印本。『明清善本小説叢刊』所収影印本。

日本には『楊家将演義』の明刊本が所蔵されていないため、台湾国立中央図書館編印歴史演義所収の影印本と、清嘉慶14年（1809）に重刻された清刊本8巻58則を底本とした上海古籍出版社の排印本（1980）を参照しながら考察を進める。

さて、『北宋志伝』と『楊家将演義』とが古典小説研究の俎上に載せられたとき、必ず論じられるのが、『北宋志伝』と『楊家将演義』とではどこがどう異なるのか、そしてどちらがより古い楊家将平話を反映したものであるかという点である。この問題について次節で少し詳しく検討してみる。

第2節 『北宋志伝』と『楊家将演義』

『北宋志伝』は世徳堂本や三台館本が明万暦20年代の刊行、『楊家将演義』は明万暦34年とそれより少し遅れて世に出ている。しかし、普及度という点では『北宋志伝』の方が圧倒的に上で、その後たびたび名称を変えながらも内容のほうはほとんど変えず流布本として長く読み継がれた。『北宋志伝』と共通の題材が講唱芸能や演劇にも多々見られ、小説とともに中国の民衆文化に大きな影響を与えてきたとされている。かたや『楊家将演義』は紀振倫という文人が序を書いていることからわかるように、文辞は『北宋志伝』よりもやや典雅であるが、『北宋志伝』ほど版を重ねることはなかった。

『北宋志伝』と『楊家将演義』の前後関係について最初に論じたのは趙景深氏である⁽²⁾。趙氏は「『楊家府』与『宋伝続集』」（『中国小説叢考』所収）の中で、『楊家将演義』の方が『北宋志伝』よりも早い時期にできたのではないかと述べている。趙氏は『北宋志伝』、『楊家将演義』双方が基づいた旧本が万暦21年より前に存在していたと考えた。『北宋志伝』の開端に、「蛮王智高兵寇境，楊府俊英文広出」，最後に、「惟有令婆恩典，直待文広征服南方，而後受封」とあるが、『楊家将演義』には楊文広の物語があるのに、『北宋志伝』には楊文広の南方征伐の話は影もかたちもない。『北宋志伝』がこのように取り上げていない話についてわざわざ言及したのはその当時『楊家将演義』がすでに刊行されており、この話がよく知られていたため触れておかないわけ

にはいかなかったからだと言。そして『楊家将演義』の序文を撰している紀振倫の語気からは彼がこの作者であるとは考えにくく、本文内にも「秦淮墨客校閲」とあるだけなので、万暦34年より前に小説『楊家将演義』は成立していた筈とする。そして『楊家将演義』と雜劇の情節を対照したとき、明初の雜劇と『楊家将演義』はよく似ているが、『北宋志伝』と雜劇との間には大きな隔たりがあることなどを根拠に『楊家将演義』の方が内容的には古いものであると主張している。

一方、趙景深氏の説とは別の見通しを述べたのが馬力氏である⁽³⁾。馬氏は『楊家将演義』の二つの注に着目した。一つは『楊家将演義』巻1第1則で太祖趙匡胤が華山の隱士陳搏に華山を売り渡す話で、「一説売華山事在太祖未登基時、備録之。」とあるが、太祖が皇帝になる前に陳搏に華山を譲る証文を書いたというこちらのエピソードは『南宋志伝』16回に見える。もう一つは『楊家将演義』巻1第6則（第7則の間違いであろう：筆者）で宋の將軍胡延贊について「又云呼」と注があるが、『北宋志伝』では本文中で「胡延贊」ではなく「呼延贊」となっており、『楊家将演義』の注は奇妙に『南北宋志伝』の本文に対応している。これを馬氏は紀振倫が『楊家将演義』を校訂する時に別の小説も参考にし、その中に『南北宋志伝』も含まれていたからだと説明する。また、『北宋志伝』、『楊家将演義』ともに周静軒詩が詠史詩として入っている（詩自体は全く異なる）ことから、二つの書は同じ人物の手で批閲されたのではないかと推測する。そして、『北宋志伝』の世徳堂本や三台館本の按語で言及されている「楊家府伝」とは当時存在した楊家将平話のことであろうと言い、その証拠として『楊家将演義』巻5第4則や『北宋志伝』38回で蕭天佐が黒龍の原形を現した場面での按語に「旧小説」（『北宋志伝』では「小説」）云々とあり、その話柄は『北宋志伝』や『楊家将演義』に見えないことを指摘する。そこから馬力氏は『楊家将演義』と『北宋志伝』の関係について、両者とも話本をその共通の底本としていたが、『楊家将演義』はその話本全体を利用したのに対し、『北宋志伝』はそれを部分的に利用したのであると結論する。オランダの中国小説研究者W.L. Idema氏は、両者の前後関係については特に何も言っていないが、『北宋志伝』の構造について極めて重要

な指摘をしている。その著『Chinese Vernacular Fiction』(1974 Leiden)の中でW.L. Idema氏は、『北宋志伝』という書はいくつかの平話のテキストが組み合わさってできたものであると主張した。氏の分析によれば、文法上の特色から見て32～38回はその前後の文章と異質であり、46～50回も、女戦士・龍祖龍母の話など前後の回とは異色の物語だということである。

さて、ここで『北宋志伝』が一体どのような構造なのか、もう少し分析してみる。

『南宋志伝』50回



『北宋志伝』50回



楊家將平話 A



楊家將平話 B



楊家將平話 C



呼家將平話

それぞれの物語がどれくらいの割合で分散しているかをグラフにしてみた。楊家將平話 A は『南宋志伝』の33～35回で始まり、そのあと『北宋志伝』の16～45回へとつながっている。ただし、その間の32～38回の破天門陣故事はW.L. Idema氏の説によれば言語的にも異質なので楊家將平話 B とした。46～50回にかけて楊宗保が西夏遠征に赴く話は楊家將平話 C とした。また、『北宋志伝』の1～15回ではたまたま楊業らも顔を見せるが、ここでの主人公は呼延贊であるので呼家將説話とした。では、『楊家將演義』の方はどうなっているのであろうか。

『楊家將演義』58則



楊家將平話 D

『楊家将演義』の1～40則までが『北宋志伝』の楊家将平話Aに相当し、字句もよく似たものが散見される。そのうち、楊家将平話Bに当たるのが25～32則である。楊六郎が世を去って以降の物語は『北宋志伝』の楊家将平話Cとかなり違い、柳州の儂智高を楊宗保が征伐する話は『北宋志伝』にない話柄であり、また、西夏征伐へ行くのは楊宗保ではなく、その子文広ということになっている。そして、最後は文広の子懷玉が宋の朝廷に愛想をつかし、太行山に登るところで終わりとなっている。これを仮に楊家将平話Dとする。

四つを数える楊家将平話の中で古態を最もよくとどめているのはAではないかと筆者は考えている。Aは楊業（令公）や楊六郎、楊五郎らが中心人物であり、これは宋代の話本『楊令公』『五郎為僧』などの系統に連なる古い物語だったのであろう。一方で「破天門陣」などの新しい物語も成立し、雜劇の題材となるなど、こちらはこちらで好評を博していた。そこでこの物語を何者かがAと組み合わせ一つの小説にする。『楊家将演義』も『北宋志伝』もこのA+Bの楊家将平話は共有している。双方の注に登場する「旧小説」とは、A+Bの部分ができた時にまたこれとは別個に存在していた話本を指していたのだとすれば、現在知られている『楊家将演義』などの楊家将物語とは全く無関係である。Aの物語は多くの元雜劇と情節が似ていることから、元来は北方成立の物語であったかもしれない。では、楊家将平話C・Dはどのような起源を持ち小説の中に入ってきたのであろうか。葉盛の『水東日記』巻21に、「今の書坊は射利の徒を相伝え、偽りて小説雜書を為る。南人は漢小王光武、蔡伯喈、楊六使文広の如きを談ずるを喜び、北人は継母大賢等の事を談ずるを喜び者甚だ多し。農工商販絵画を抄写し、家に畜えて人之を有つ。痴＝（馬＋矣）婦女の尤も酷好する所なり。」とする。葉盛（1420 - 1474）は明正統10年の進士。この当時でもやはり楊家将の物語は人気があったようである。「楊六使文広」は前の句からすると、一人の名前のようだが、『北宋志伝』で「六使」と言えば楊六郎のことである。『楊家将演義』では楊文広は大変な美男子であり、女性の読者、もしくは視聴者が楊文広が主人公の物語を喜んだことは想像に難くない。Aを除く楊家将平話は神魔小説的な色彩

が濃厚であるが、特に『楊家将演義』のCはその傾向が顕著であり、至るところに明代に刊行された講唱芸能『成化説唱詞話』と似通った情節を見つけることができる。例えば、『楊家将演義』巻7「月英怒攻錦姑」では、鮑飛雲という武勇にすぐれた女性が登場してくる。彼女は楊文広に一目惚れし、やがて二人は結ばれるのだが、この話は『成化説唱詞話』の『花関索伝』の花関索と鮑三娘を思い起こさせる。このような話柄は南方中国ではごく最近まで好まれていたようであり、江南で出版された英雄伝奇小説や、広東の木魚書、潮州の潮州歌冊などから類似の話柄をいくらかでも見いだせる。またこの他にも明初の『薛仁貴征遼事略』を連想させる場面、『西遊記』、『三国演義』とよく似た場面などが目につく。『楊家将演義』に『三国演義』と似た情節が見られることは金文京氏が指摘しているが⁽⁴⁾、『三国演義』や『水滸伝』に似た箇所はDだけでなくAにもあり、これらは中国の地域社会がつくりだした英雄物語の類型なのであろう。話をDに戻すと、Dは『成化説唱詞話』のような元明時代の南方の講唱芸能がその基礎にあり、北方で成立したAにBの平話を組み込み(Bは南方の物語か)、その後で楊家将の三代目以降の英雄物語Dを継ぎ足したのが今の『楊家将演義』なのではないか。一方、『北宋志伝』もAとBの楊家将平話を用い、それに呼延賛一族の物語、呼家将平話を加えた。そして楊六郎が死んだあとにはCの平話を用いたのであろう。『北宋志伝』の冒頭の前編では「楊府英俊文広」とあるから、原作者は初めから楊文広の南方征伐の話を知っており、それも『北宋志伝』の中に入れる心づもりだったかもしれないが、いかなる事情があつてか現行のテキストには取り入れられていない。CはもとよりDと同じテキストではないけれども、物語の基本構造に共通点が見られ、ともに南方の講唱芸能に基づき整理された同系統のものであつたろう。

第3節 『北宋志伝』の基づいた歴史書

本節では、従来全く目が向けられていなかった『北宋志伝』と歴史書との関係について考察する。『南宋志伝』が明嘉靖の人、熊大木編集の作品である

ことはすでに実証済みであるが、趙景深氏のように『北宋志伝』は『南宋志伝』の成書後、熊大木以外の人によって作られたのではないかという学者もいる。では以下詠史詩、評注、本文という順序で検討していく。まず『北宋志伝』の詠史詩であるが、主な詠史詩の分布状況はこうになっている。

表1 『北宋志伝』の主な詠史詩

巻	後人	無名氏	宋賢	周静軒	古風	杜甫
11	1	3		1	1	
12	2	3				
13	3	2		3		
14	3	1		1		
15	2	2				
16	1	1				古人1
17	3	12				
18		7				
19	5	1	1			
20		6				
計	20	38	1	5	1	

詠史詩の種類は『南宋志伝』と大差ないが、周静軒詩が僅かに5首しかなく、しかも巻15以降には一首もない。これは『北宋志伝』があとへいけばいくほど史実から乖離するので、周静軒の詠史詩を挿入しようにも挿入しようがなかったのだろう。次に史評と注をしてみる。

表2 『北宋志伝』(三台館本)の主な評注一覧

巻	題名	典故
13	宋史断日	『節要統編』巻2 李燾評。 『李氏綱鑑』巻28, 『湯氏綱鑑』巻49, 『王氏大全』巻28, 『王氏綱鑑』巻2では李燾評として載っている〔太平興国5年〕。成化刊本と慎獨齋嘉靖刊本の『統綱目』巻2, 『通鑑纂要』巻68, 『黃氏綱目統編』巻2, 『鍾氏綱鑑』巻50では呂中評となっているが、文字に特に異同はない。『通鑑統編』にはこの叙述がないが『節要統編』では李燾評となっているので、おそらく劉惔があとで増補したものであろう。『統資治通鑑長編』太平興国5年にもこの

13 按陳搏 『節要統編』卷2按

傍線の部分が『節要続編』ではなく、また「官禄」を「干禄」につくる。

14 按普性 『節要統編』卷2本文〔淳化3年〕

これは熊大木の注釈であろうか。『大明一統志』巻19「太原府」条に「楊文広，延昭子」とある。

緣何此陣有許多變化而不能互相救應。……

18 按一統志 『大明一統志』卷19

『楊家将演義』巻5にも「按一統志，王貴，太原人，楊業母黨之弟。投降於宋，屢戰有功，遂得真宗寵愛焉。」という小字注がある。この前後，『北宋志伝』と『楊家将演義』は叙述が非常によく似ている。『北宋志伝』，『楊家将演義』ともに「楊環」という人物は顔を見せない。ここでいう「小説」は『北宋志伝』，『楊家将演義』に先行する平話を指しているのであろう。『大明一統志』巻19「太原府」の条に，「王貴，太原人。累官都指揮使。太宗時從潘美北征，頗立戰功。及從楊業為遼兵所困，親射數十人，矢盡張空拳又擊殺數人，遂遇害。時年已七十三矣。」とある。『楊家将演義』の按語で「遂得真宗寵愛焉」とあるが，王貴や楊業は太宗の時に戦没したのであるから，「真宗」は誤りである。

18 按小説 未詳

○按小説天佐現出本相，頭載飛落黃州城。後作火離國王。尾載飛去鉄林洞，後作河口軍師，又乱中国。此語且表過。

『楊家將演義』巻5にも，「按小説，天佐現出本相，被五郎審為兩段，其頭飛落黃瓊城。化為人，後称大痔國王。其尾飛落鉄林洞，化為人，後作河口軍師父，復大乱中国。」という注がある。やはり『北宋志伝』の注とよく似ているが，異同もないわけではない。これは『北宋志伝』と『楊家將演義』が参照した平話の底本にそれぞれ同じような注が付いていたためであり，『楊家將演義』をつくるときに『北宋志伝』から引き写したということではないだろう。

19 按通鑑 『節要統編』巻2本文。

按通鑑，八王乃德昭也。初封武功郡王。因太宗久不行太原之賞。德昭以為言。帝大怒曰，待汝為之賞未晚也。德昭退而自刎。時在太平興國四年。此小説終於真宗之朝，舛誤甚矣。因表出而為智者考焉。

「按通鑑」とあるが，『通鑑』には当然このような記述はない。『節要統編』巻2では「八月，皇子武功郡王德昭自殺。德昭從帝攻太原。軍中嘗夜驚，不知帝所在。有謀立德昭者。会知帝处，乃止。帝聞不悅。乃還耗。故久不行太原之賞。德昭以為言。帝大怒曰，待汝自為之賞未晚也。德昭退而自刎。帝聞之驚悔，往抱其屍，大哭曰，癡兒何至此耶。追封魏王。」とあって諸書の中で一番近く，また『李氏綱鑑』巻28，『統綱目』巻2もほとんどこれと同文である。傍線部「此小説」以下は熊大木の評語なのであろう。『統綱目』の叙述もほとんど同じ。

さて，これらのなかから を取り上げ，少し詳しく見てみる。

例1

按普性深沈剛毅果斷，雖多忌克而能以天下事為己任。故其当揆，惟義是從。僊武修文，慎罰薄斂，以立宏規於後世。其功大矣。少習吏事，寡學術。太祖勸以讀書，遂手不釋卷，每歸私第，闔門啓篋，取書誦之竟日。及次日臨政，處決如流。既卒。家人發篋，取書視之，則論語二十篇也。嘗謂帝曰，臣有論語一部，以半部佐太祖定天下，以半部佐陛下致太平。普相兩朝，未嘗為子弟求恩沢。卒年七十一歲。後諡忠獻公。封韓王。（『北宋志伝』巻14）

×普性深沈剛毅果斷，雖多忌克而能以天下事為己任。故其当揆，惟義是從。僊武修文，慎罰薄斂，以立宏規於後世。其功大矣。少習吏事，寡學術。太祖勸以讀書，

例 2

其詔曰，王者賜＝推恩，与衆共樂，所以表昇平之盛事，契億兆之歡心，累朝以来此事久廢，盖逢多故，莫举旧章，今四海会同，万民康泰，敵＝始畢，慶澤均行，宜令士庶，共慶休明，可賜＝三日。（『北宋志伝』巻13）＝は西＋甫、示＋重

それぞれの史書のあいだで違いがはっきりしているのであえて対校表にできなかった。『節要統編』巻2本文〔雍熙元年〕が『北宋志伝』と同文，薛应旂『宋元通鑑』巻6が「会同」を「混同」につくり「可賜＝（西＋甫）三日」のあとに数句あるほかは同文，『通鑑統編』巻4では同じく「可賜＝（西＋甫）三日」のあとに95字ある。だが『続資治通鑑長編』，『宋史通鑑』，『統綱目』，『通鑑纂要』，『黄氏綱目』，『李氏綱鑑』，『王氏大全』にはこの詔自体がない。意外なのは『王氏綱鑑』巻2や『鍾氏綱鑑』巻50で，一部省略されているものの詔は載せられている。

もう一つ，例を挙げる。

例 3

張齊賢上疏奏曰，聖人舉事，動在万全，百戰百勝，不若不戰而勝，若重之謹之，戎虜不足吞，燕薊不足取，自古疆場之難，非尽由戎狄亦多，因辺吏擾而致之。若縁辺諸寨，撫御得人，但使峻壘深溝，蓄力養銳，自逸以処，寧我致人所謂擇卒不如擇將。任力不及任人。如是則辺鄙寧而河北之民獲休息矣。臣又聞，家六合者，以天下為心。豈止争尺寸之土，角戎狄之勢而已。是故聖人先本而後末。安内以養外，是知五帝三王，未有不先根本者也。堯舜之道無他。広推恩於天下之民爾。推恩者何××。安在而利之，民既安利，則戎狄歛衽而至矣。（『北宋志伝』巻13）

張齊賢上疏奏曰，聖人舉事，動在万全，百戰百勝，不若不戰而勝，若重之謹之，戎虜不足吞，燕薊不足取，自古疆場之難，非尽由戎狄亦多，×辺吏擾而致之。若縁辺諸寨，撫御得人，但使峻壘深溝，畜力養銳，以逸以処，寧我致人所謂擇卒不如擇將。任力不及任人。如是則辺鄙寧而河北之民獲休息矣。臣又聞，家六合者，以天下為心。豈止争尺寸之土，角戎狄之勢而已。是故聖人先本而後末。安内以養

外，是知五帝三王，未有不先根本者也。堯舜之道無他。広推恩於天下之民爾。推恩者何在乎。安在而利之，民既安利，則戎狄歛衽而至矣。（『節要統編』卷2〔太平興國5年〕）

張齊賢上疏奏曰，聖人舉事，動在万全，百戰百勝，不若不戰而勝，××××××××××××××××，自古疆場之難，非尽由戎狄亦多，×遼吏擾而致之。若緣遼諸軍，撫御得人，但使峻壘深溝，畜力養銳，以逸自處，××××××××××××××××則遼鄙寧而河北之民獲休息矣。臣又聞，家六合者，以天下為心。豈止爭尺寸之士，角戎狄之勢而已。是故聖人先本而後末。安內以養外，××××××××××××××××。堯舜之道無他。広推恩於天下之民爾。××××××××××××××××，民既安利，則戎狄歛衽而至矣。（『統綱目』卷2）

『通鑑統編』にはこの文章がないので、『節要統編』はおそらく『統資治通鑑長編』から引用したのであろう。『統資治通鑑長編』の太平興國5年には張齊賢の疏を載せるが、全部で四段あり、そのうち二、三段のところを若干削ったのがこの文章である。『宋史通鑑』は『節要統編』とあまり異同はないが、「寧我致人」のあとに「李牧所以称良將於趙，用此術也」の文字がある。薛應旂『宋元通鑑』巻5もこれよりははるかに長い。また、『李氏綱鑑』巻28，『王氏綱鑑』巻2，『王氏大全』巻28，『湯氏綱鑑』巻49は『節要統編』とほぼ同文である。『統綱目』には削られてしまっている部分が多く、『北宋志伝』の底本であった可能性はほとんど考えられない。『黄氏綱目』巻2は『統綱目』，王宗沐『宋元通鑑』巻3に同じ。『通鑑纂要』巻68は『統綱目』より更に文辞を簡潔にしておき、いずれにせよどちらも用いられていなかったようである。

以上で、『北宋志伝』が劉惔の『節要統編』かその系統の通俗歴史書によって増補されていたことを明らかにした。ただし、『北宋志伝』の後半部はほとんど史実と対応しない虚構の物語であるため、歴史書の引用は前半部にしか出てこない。この『北宋志伝』の中で、歴史書の引用は楊家将の物語と物語とを結びつける接着剤の役目を果たしているだけでなく、歴史書の成分をほんの少しでも注入することによって荒唐無稽な英雄物語を歴史演義らしく見

せかけるのに一役買っている。『南宋志伝』の編集過程でもやはり『節要続編』が用いられていたもので、『北宋志伝』と『南宋志伝』が同一人物の手によって作られていたこと、そしてそれが熊大木その人であったことはほぼ間違いないであろう。

小 結

『北宋志伝』の冒頭の按語に「……………収集楊家府等伝、総成二十卷、取其掲始要終之意、並依原成本、參入史鑑、年月編定、四方君子、覽者幸垂藻鑑。」とある。ここで言う「楊家府等伝」とは、楊家将平話A・BやC及び呼家将平話のことであろう。『北宋志伝』が編まれる時に用いられた楊家将平話は、『楊家将演義』の依拠した底本とよく似たものであったらしい。また按語に「參入史鑑」とあるのも決して出鱈目ではなかった。すでに見たように、周静軒『続通鑑綱目発明』や李燾評の引用があるほか、本文にも『節要続編』に極めてよく似た文章が用いられており、周静軒の詠史詩も挟み込まれていることから、『北宋志伝』は『南宋志伝』と同じく明嘉靖年間（1522-1566）に福建建陽で熊大木が編集したものと考えられる。となると、現在残っている三台館本や世徳堂本は万暦20年（1592）以降の刊本であるから、おそらくそのもとになった原刊本が嘉靖30年（1551）の前後に熊大木と関係の深い書肆楊氏清江堂あたりから出版されていたと見るべきであろう。

『北宋志伝』と対立する小説、『楊家将演義』は万暦34年序がありその刊行は『北宋志伝』に遅れているものの、その核となる楊家将平話A・Bの部分はたぶん『北宋志伝』と基本的に同じものを用いた筈である。馬力氏は『楊家将演義』を校閲する段階で『北宋志伝』が利用されていたと考えるが、『楊家将演義』の注の誤記を見てもそこまで丁寧な仕事をやっていたとは思えない。両書は同じ平話を底本とするものの、全く別々に成立したと見るのが妥当ではないだろうか。『北宋志伝』と『楊家将演義』とで大きく異なるのは、『北宋志伝』の呼家将平話及び楊家将平話Cと、『楊家将演義』の楊家将平話Dのところである。熊大木は楊文広の南方遠征の物語を知っていた筈だが、

小説の中では取り上げなかった。その理由の一つには、この話があまりにも現実離れした『西遊記』的な物語展開であったからかもしれない。熊大木のほかの小説を見ても、妖術使いや神仙もほとんど登場せず、神魔小説的な要素は少ない。あくまで史実に忠実な歴史演義を目指そうという熊大木にとっては楊文広故事は許容範囲を超えたものであったのだろう。一方、『楊家将演義』はこの命名自体に歴史演義を乗り越えた小説を生みだそうという編集者の意図が読み取れる。なぜならば、楊家将の物語はそのほとんどが民間でつくられたものであり、『北宋志伝』のように歴史書を用いて増補することを拒否するなら、それは限りなくフィクションに近いものになるからである。そして、『楊家将演義』の編集者は『北宋志伝』では切り捨てられた楊文広の故事を含む楊家将平話Dを積極的に吸収し、その書名に恥じない楊家将の小説を作り上げた。前に『北宋志伝』の方が『楊家将演義』よりも俗文学の世界に広く影響を及ぼしていると言われていることを紹介したが、確かに京劇などでは『北宋志伝』と似た情節の演目が頗る多い。ただ、長江より南の地域では少し事情が異なるようで、楊六郎が死んで以後の話に限って言えば『北宋志伝』よりむしろ『楊家将演義』の物語の方が優勢のようである。無論これは『楊家将演義』中の楊家将平話Dが江南の講唱芸能を母胎としていたことと大きな関わりがあろう。江南の演劇・講唱芸能中における楊家将物語演變の諸相については今後の検討に待ちたい。

- 1 楊家将故事の本事考証では次の論文が裨益するところ大であった。衛聚賢「『楊家将』考証」(『小説考証集』説文社1944所収)、余嘉錫「楊家将故事考信録」(『余嘉錫論学雜著』中華書局1977所収)。これらは排印本『楊家将演義』(宝文堂書店1980)にも付録として節録されている。趙景深「楊家将故事的演变」(『中国小説叢考』齊魯書社1980所収)。
- 2 趙景深「『楊家府』与『宋伝統集』」(『中国小説叢考』齊魯書社1980所収)参照。
- 3 馬力「『南北宋志伝』与楊家将小説」(『文史』12, 1983) 270～271頁。
- 4 金文京「三国志演義の世界」(東方書店1993) 四「羅貫中の謎」147頁。